

● CNC P はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です ●

シリーズ「土木ということば」 第22回 翻訳された方丈記の「土木」

方丈記（鴨長明）』（1212年成立）に「いまうつり住人は土木の煩あることを嘆く」がある。現代語訳は「新たに移住してきた人は、建築のやっかいさを嘆いている。」〔築瀬一雄訳注：方丈記、角川学芸出版、2010年〕である。

日本の古典文学の傑作として、夏目漱石をはじめとして、多くの日本文学研究者が『方丈記』を翻訳している。初期の『A Description of My Hut（夏目漱石）』（1893年）、英国の日本語書記官による『A History of JAPANESE LITERATURE（W. G. Aston 他）』（1899年）は残念ながら全訳ではなく、福原遷都の「土木の煩」の部分は欠けている。

南方熊楠はF. V. Dickinsと連名で「Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland（王立アジア協会誌）」に発表した『A Japanese Thoreau of the Twelfth Century（12世紀の日本のソロー）』

（1905年）という論文で“the newcomers had to live amid the unpleasant bustle of construction.”と英訳して、「土木の煩」を「建設の煩わしさ」としている。

Donald Keene（2012年に帰化してキーン ドナルドに）は「Anthology of Japanese literature（日本文学選集）」の『An Account of My Hut』（1955年）で、“those who now moved there complained over the difficulties of putting up houses.”と英訳して、「家を建てることの難しさ」としている。

このほか、『方丈記』には、英語（多数）、ドイツ語、ラテン語、アラビア語への翻訳があり、“the difficulties of building”などの表現が多い。

（土木学会土木広報センター次長 小松 淳）

Vol.70 コンテンツ

巻頭言	生涯現役・シニア活動の展望	辻田 満	2
コラム	そもそも土木とは何なのか	野村 吉春	3
「身近な土木遺産」シリーズ	第1回 シリーズ開始にあたって	田中 努	6
部門活動紹介	土木と市民社会をつなぐ事業研究会報告（その1）	事業化推進部門	8
サポーターからの投稿	情報プラットフォーム構築に関する取り組み	土井 麻記子	9
事務局通信			11